

れる時、往々にして、翻訳及び書き換え（re-writing）の過程を見落としがちであるが、「村上春樹の影響を受けている」台湾作家たちは、村上の翻訳者（多くは頼明珠）の直接の影響を受けているのである。そして、台湾の読者の村上翻訳文学受容の独特な現象は、もう一つの翻訳—文化翻訳となって現れるのである。書き換え（re-writing）の持つ創造力は、文学や文学史だけでなく、翻訳文学を通じて、ある程度歴史をも書き換え（re-write）うることを、本書は論証しているのである。

小特集＊中国語圏の村上春樹

「ポストモダン文学」としての村上春樹文学

王 姿雯

楊炳菁は、北京外語大学日語系で日語語言文学士号と修士号とを取得後、二〇〇九年に吉林大学文学院比較文学与世界文学専業文学で博士号を取得、現在は北外大日語系副教授を務める新進気鋭の現代日本文学研究者である。楊氏は二〇

台湾の社会が変化していく限り、台湾における村上春樹の翻訳文学および文化翻訳は変化しつづけるのであり、同時にこうした台湾の村上の翻訳文学およびその文化翻訳が、台湾の社会の歴史を多少なりとも書き変えていくこともあり得るのだと言えよう。

本書において張は、二冊の村上春樹文学研究書、ハーバード大学教授ジェイ・ルービン氏の Haruki Murakami and The Music of Words（中国語訳『聽見100%的村上春樹』二〇〇四年）及び藤

〇六年に大東文化大学の訪問研究員として日本に一年滞在したが、その間にも博論にあたる本書の構想をしていたのである。

本書は序章と終章を除いて四章からなる。第一章「後現代語境中的村上春樹

井省三の『村上春樹のなかの中国』（中国語訳『村上春樹心底の中国』二〇〇八年）の翻訳が、台湾の村上読者にとって、重要な書き換え者（re-writer）となったと述べているが、台湾における村上文学研究書を中国語で執筆した台湾出身の張もまた、台湾の村上翻訳文学／文化翻訳にとって、重要な書き換え者であることは間違いないであろう。

（まぐさ・ひろこ 東京大学大学院博士課程／ハーヴァード・イェンチン研究所訪問研究員）

楊炳菁著
後現代語境中的村上春樹
中央編訳出版社
二〇〇九年「二、七九三円」

創作（ポストモダンのコンテクストにおける村上春樹文学）では、村上の成長史と戦後日本史をたどりながら村上文学の起源を考察している。楊氏によると、一九

中国年鑑 2011

◎好評発売中◎

中国研究所 編・発行

毎日新聞社 発売

1955 年創刊。現代中国に
関するあらゆる分野の最新
情報、基本情報を提供。

B5 判 498 頁

価格: 18,900 円(税込)

◆特集

波立つ海洋・動き出す内陸

建国から 60 年が過ぎた中国
が大国として求められる、内
外で抱えるさまざまな課題を
取り上げた論考を掲載。

◆動向

政治、外交、経済、対外経
済、文化、社会

◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしく
み、軍事、少数民族、華僑・
華人、香港、マカオ、台湾、
国民経済・国民生活、財政、
金融、証券・保険、農業、工
業、資源・エネルギー、交通
運輸、対外経済、知的財産
権、労働、暮らし、社会保障・
医療制度、環境問題、NGO・
NPO、教育、文化、宗教

◆資料

統計公報、重要文献、主要人
事、2010 年日誌ほか

※お問い合わせは中国研究
所事務局まで。

一般
社団法人 中国研究所

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chuken@tcn-catv.ne.jp

URL: http://www.soc.nii.ac.jp/ca/

七九年『風の歌を聴け』で正式に作家デ
ビュリーしてから二〇〇年までの村上の
創作は、「二つ目の十年」と「二つ目の
十年」との二期に分けられる。第一期
の代表作が『風の歌を聴け』のほか、
『世界の終りとハードボイルド・ワンダー
ランド』（一九八五年）と『ノルウェイの
森』（一九八七年）（以下『世界』と『森』と
略す）であり、これらの作品の特徴は洗
練さであるという。第二期の代表作とし
ては『ねじまき鳥クロニクル』（一九九四
—一九九五年）（以下『ねじまき鳥』と略す）
を挙げ、この時期の村上は、積極的に社
会問題への関心を示し、第一期に見ら
れた「自己観照」のような「不介入（デ
タッチメント）」の態度に対し、「介入（ア

タッチメント）」の態度が顕著となったと
楊氏は指摘している。二〇〇二年の作品
『海辺のカフカ』に対しては、歴史の忘
却によって個人の傷を癒す傾向が見られ
ると現代日本文学専攻の小森陽一・東大
教授が厳しく批判しているが、楊氏は逆
にこれを小森氏の読み違えとして退けて
いる。また村上は翻訳家でもあるため、
翻訳を通して村上文学の中で「文化越境」
の状況が窺えることも論じている。

第二章「村上春樹小説の後現代特徴与
芸術突破（村上春樹小説でのポストモダン
の特徴と芸術上の突破）」は村上作品にお
ける「ポストモダン」の特徴、日本近代
文学史における村上文体の新しさを指摘
している。楊氏によれば、村上作品は大
量のブランド名、映画名、音楽名などの
消費記号を通して、日本社会のポストモ
ダン文化を表現する一方、自己認識とい
うテーマにおいて、村上は日本近代文学
の課題を継承し、特に漱石との共通点
を持つという。漱石も村上も、近代化やポ
ストモダン化に伴って日本に生じる西洋
化の問題に向き合っており、このような
漱石から村上へという日本近代文学にお
ける系譜関係を考える際に、楊氏は日本
近代文学の「敘述話語欠発達（語りの言
語の発達が欠けていること）」、「重視語言、
特別是日語本身在話語中的作用（言語、
特に日本語自体の語りにおける作用を重視
すること）」、「故事層面的現実性（物語位
相での現実性）」の三つの特徴を指摘して

いる。

このような楊氏による日本語の語りの言語的特徴からは、三谷邦明の論点が想起されることだろう。三谷は日本近代小説の特徴として三人称が主語となる際に文末の「らしい」などの推量詞を省略することによって、「三人称／過去」と「一人称／現在」という重層的な構造が現れる、と論じている（『近代小説の「語り」と「言説」、有精堂出版、一九九六年」。

確かに楊氏が挙げる三つの特徴は日本語の言語的特徴と関係しているのであろう。柄谷行人は、言文一致運動で行われた言語実験によって近代文学の特殊性——つまり楊氏の提起する三つの特徴——が成立し、作家たちの創作もこれによって制限されるようになったと指摘している（『日本近代文学の起源 増補版』岩波現代文庫、二〇〇八年）。漢文学の教養があった明治期の代表的作家漱石が、言文一致による創作活動において言語的実験を行ったことは想像に難くない。

村上が真に言文一致以来の束縛を解いたのか否か——これは大変興味深い問題

である。本書も言及しているように、村上本人は今まで日本文学の影響を受けていないと語っていたが、例えば『海辺のカフカ』は日本文学の遺産を取り入れており、村上はある時点から積極的に日本文学を読み直し、先人の言語的実験に気づいたという。

『世界』、『森』、『ねじまき鳥』、『海辺のカフカ』を詳細に分析した第三章「自我的形象化与他者化（自我的形象化与他者化）」及び第四章「歴史的橋梁化与隠喻化（掛け橋および隠喻としての歴史）」は、『世界』と『森』では村上が「自我」「他者」の関係を語り、自我のイメージを登場人物に投射することによって自己を探究しており、『ねじまき鳥』と『海辺のカフカ』では歴史を媒介または隠喻とし、歴史に対して開放的な態度を取ることによって、読者と共に歴史や暴力の諸相を思索している、と指摘している。

以上のように、本書は「ポストモダン」の現在において、村上文学を「ポストモダン文学」として位置づけ、さらにその意義を解明している。その手掛かりとし

て、近代文学における二大テーマ——自己認識と歴史叙述——がどのように戦後新世代である村上によって再認識され、表現されているのか、という問題を『風の歌を聴け』から『海辺のカフカ』までの作品を論じて分析したのである。一九七二年生まれの楊氏は「文化大革命」後期の出生であり、本書の出版は所謂「七〇后」世代の日本文学研究が世界的レベルに達していることを示すものであることは、藤井省三が序文「中国／70后的村上春樹論」で指摘している通りであろう。確かに、『後現代語境中的村上春樹』の出版を通して、中国の「村上文学研究」は世界に広がっていくに違いない。

（おう・しぶん 東京大学中国語中国文学専門分野博士課程）

